

07. 「民主主義」を抱きしめて

——石坂洋次郎映画はいかにして「民主主義」を
戦後日本社会に受容させるに至ったか

千葉 慶

本稿は、戦後日本の大衆文化を介した「民主主義」受容の〈海賊的〉プロセスを石坂洋次郎映画の分析を通して考察するケース・スタディである。

本稿を執筆している2015年は、ちょうど「戦後70年」の節目に当たる年である。また、日本では1999年の国旗国歌法成立以降、日本国憲法に規定された戦後体制を見なおそうとする政治的勢力の動きがますます活発になっており、憲法改定に賛意を唱えるにせよ、そうでないにせよ、「戦後民主主義」の検討は急務になっている状況にある。

しかしながら、「戦後民主主義」の検討と言ったところで、それが日常生活に根差しながらその外側に向けて発信される、特定の目的意識を持った狭義の政治行動としての「民主主義」の発露の検討に限定されるのであれば、不十分なのではないか。わたしたちの間には、日常生活の内側に留まる身近なレベルでも「民主主義」が刻まれているのではないか。例えば、「民主主義」という体験を経て普及が可能になった人間像やライフスタイル像といった形で浸透しているといったような、極私的かつ非正規的かつ日常的な「民主主義」の受容形態があるだろう。本書のキーワードに従えば、〈海賊的受容〉ということができるだろうか。

もちろん、こうした受容形態は、曖昧模糊としており意識されにくい上に、個々のケースによって千差万別であり、分析対象として取り上げることは困難に違いない。そこで本稿では、大衆文化を介して、多くの人々に強い影響を与えたと考えられるベストセラーの映画化作品に描かれた「民主主義」表現の分析をもって、政治理念である「民主主義」が他者から押し付けられる形ではなく、身近な人間像やライフスタイル像という形で日常生活へと模倣（受容）しやすい形態へと翻案される——「民主主義」が抱きしめられる——プロセスの検討を試みたい。

本稿が石坂洋次郎映画を分析対象とする理由は、第一に、彼が戦後の『青い山脈』を初めとして「民主主義」を恋愛や家族という日常的テーマに即して描くことを得意とし、そのような作品群の多くをベストセラーとして世に送り出したことである。ゆえに、石坂作品は、戦後日本における極私的かつ日常的な「民主主義」のあり方に強い影響を与えた表象の一つといえる。第二は、石坂作品が、1937年から1988年に至る長期にわたって82本も映画化されていたことである。したがって、戦後の長いスパンを対象に、その表現の変化を追うことが可能である。第三は、石坂洋次郎映画が、複数の原作を用い、長期にわたって製作され続けたにもかかわらず、各作品に共通したパターンを踏襲していたことである。したがって、これらの映画を分析することで、時代の変化が「民主主

義」表現にどのような影響を与えたかを理解することができる。